

---

# 病みつきなのは～裏話～

黽b

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

病みつきなのは〜裏話〜

### 【ZPDF】

Z0657Y

### 【作者名】

勲b

### 【あらすじ】

病みつきシリーズ第10弾！！　なのは目線の病みつきなのはです。  
　　彼はティアナのモノ？　認めない……認めたくない。  
私は　　私がだけが彼の傍にいるべきなんだ！！　オリ主  
×なのはです　　病みつきなのはの目線変更です　　『病みつきティアナ』と『病みつきなのはシリーズ』の話もあります。

(前書き)

裏話第一二段ーー！

ティアナ裏話から少しだけ書き方を変えてみました。

彼が風邪で倒れた。

わたしがそれを聞いたのは朝の訓練の時にティアナからだった。

……今日の朝は彼に会えないんだ

流石に風邪で倒れている彼に訓練をさせるわけにはいかない。

私は彼を抜いたFW陣で朝の訓練を開始した。

なんでティアナは彼が風邪で倒れていることを知っている  
んだろう

そんな疑問を胸に抱きながら。

朝の訓練が終わってFW陣が解散する前にわたしはティアナを呼んだ。

「どうしたんですか、なのまさと

顔には出でないが明らかに嫌そうにティアナは言つ。

「彼が風邪で倒れたのを何でティアナが知つてたのか気になつて  
ね」

普通なら隊長であるわたしが言つのが先のはずなのに……

何でわたしじゃなくてティアナに連絡したんだろう。

「私が彼に用があつて部屋に訪ねたんです

「その時の彼が見てわかるぐらい体調が悪そうだったんで調べた  
ら熱がありました」

……そつか。

「……」

だつて、わたしは隊長だもん。

教えるなら先ずはわたしからだよ。

「……なのはさん

ティアナは首を傾げながら言つ。

「何でなのはさんが彼を気にするんですか？」

そんなの

「同じ部隊の仲間だからだよ」

あたりまえだ。

彼はわたし達と同じ部隊の仲間なんだから。

そんな彼を心配するのは当然だ。

「……そうですか」

ティアナは冷たく言つ。

「今から私は彼の看病に行くんで失礼します  
「なのはさんは来なくとも大丈夫ですよ  
「彼を看病するのは私だけで充分ですから」

ティアナはそれだけ言つと歩きだした。

「でも

ティアナはわたしが言い終わる前に被せて言つ。

「必要ありません  
「彼にはあたし以外

……心配だよ

でも、ティアナが看病するなら大丈夫

かな?

仕事が終わつたらティアナと一緒に看病に行こうーー!

わたしはそんなことを考へながら歩いた。

仕事が終わり、ティアナと共に彼の看病をするため彼の部屋に向かっていた。

そんな時、偶然にもティアナを見つけたため声を掛けた。

「ティアナ」

ティアナがわたしの方を向く。

ティアナは小さめの鍋を持っていた。

彼に何か作ったのかな？

料理だつたらわたしの方が上手いのに

彼にわたしの手料理食べてほしかったなー

ちょっと残念だ。

「どうしたんですか、なのはさん」

ティアナは何時もよつ早口で言つ。

「彼は大丈夫？」

ティアナだつて疲れてるんだから、早く休んでほしいし  
やつぱり、彼の看病はわたしがしたほうがいいよね。

……彼だつてそのほうが喜んでくれるだろ？

「大丈夫ですよ

「あたしが彼を看病してるんで」

それでも

「でも、やつぱり心配だよ

「わたし彼の様子見てくるね」

「待つてください……！」

部屋に向かおうとしたわたしをティアナが止めた。

「なのはさんに風邪が移つたら大変ですし、行かないほうがいい  
ですよ

「彼のことはあたしに任せたなのはさんは自室に寝つたらどうで  
すか？」

「でも……」

今日一日彼に会つてないし

それに、彼の看病もしてあげたい。

「ティアナは今から彼の看病に行くんでしょう？」

「彼も看病してもらう人が1人より2人の方がいいと思うんだ  
だから、わたしもティアナと一緒に」

「いりませんよ

「彼だって、なのはさんが居てほしくないと思いますよ」

わたしはそれを聞いて目線を床に移す。

そんなこと……

でも、もしそうだったら……

「……そうかな」

それでも

「でも……」

目線をティアナに移してわたしは言つ。

「ティアナだって訓練終わりで疲れてるでしょう？」

「だから、わたしもティアナの手伝いしちゃ駄目かな？」

「わたしもかれのために何かしたいの！？」

風邪で寝込んでいる彼のためになりたい。

訓練終わりで疲れてるティアナのためになりたい。

でも、そんなわたしにティアナは叩きつけるように叫ぶ。

「いりませんよ！！

—彼の傍にはあたしか居ますから、大丈夫です！！

つ  
！  
！

わたしはそれを聞いて俯く。

「それでは、失礼します」

黙っているわたしを置いていくよう」ティアナは歩きだす。

……」んなことしちゃ駄目だと思つがど

わたしはティアラにある魔法を使いたい。

ティアナがそれに気付かずに歩いているのを確認したら、わたしも自室に向かった。

ティアナが聞こえた音を聞こえるよ、ひこしたんだだけ

わからない。

意味がわからない。

何で彼がティアナに告白してるの？

何で彼が？

そんなのまるで彼がティアナのことを

ない

り な

ありえない

ありえない！！

何で！何で彼が！？

ティアナに

ティアナに告白してるの！？

何で

「お粥の材料切つてるときに怪我しちゃったの

「少し深く切っぢやつてね」

1人困惑しているわたしを置いてティアナは進める。

「六課解散までにお互いに本気で好きな人ができるたら別れる

えつ？

別れる？

彼とティアナが？

……別れる

わたしは彼がティアナの傷口を舐める音を聞きながら、ゆっくりと田を閉じた。

今後、どうすればいいかを考えるために

何でわたしはこんなにも嫌悪感を感じてるのかを考える

ために

何でわたしは

「少しいいかな」

彼とティアナが付き合ってから直ぐの「こと、わたしは彼を自室に誘つた。

自分の気持ちを理解したいから

わたしは彼のこと好きなのかもしれない。

……わからない。

わたしは異性を好きになつたことが無いから、この気持ちが何なのかがわからない。

だから、この気持ちを理解するために

「すいません、先に約束した人がいて」

頭を下げながら彼は言つ。

下げる必要なんかないの!!。

「君は悪くないよ!!」

「悪いのは」

悪いのは彼じゃない

「今田は諦めるよ

「それじゃ、おやすみなさい」

悪いのは全部ティアナだもん

わたしは彼に背を向けて歩きだす。

彼も今から約束してた人に会いに行くんだろう。

少ししたあと、わたしは彼の後を付けることにした。

彼が約束してた人はやっぱりティアナだった。

彼とティアナは2人仲良く笑みを浮かべながら何か話している。

……彼が嬉しそうに笑っているのを見ると胸が締め付けられるようになる。

それと同時にティアナが憎くなつてくる。

……ティアナがいなければ今ごろ2人で話していたのかもしれない。

そう考えるだけでティアナが憎くなる。

そして

ティアナの部屋の前に付くと、2人は

キスをした

わたし以外の人とキスをしている彼を見る。

嫌だ

こんなのは嫌だ！！

自分でもりよくわからない、でも嫌だ。

わたしは

その日、じゅうやつて部屋に帰つてきたかもわからないわたしは、  
彼のことを思い出す。

初めて会つたときから、今日のティアナとキスしてるとこ今まで、  
全て昨日の事のように思い出せる。

それぐらい

それぐらいわたしは彼のことが好き

……好きなんだ。

ユーノ君やクロノ君とは違う、全然違う。

比べものにならないぐらい彼のことが好き。

だから

ティアナから、彼を取り戻す。

きっと彼が言った告白もティアナに無理矢理言わされたんだ。

そうに違いない。

それ以外ありえない

ありえない。

あれから2日後。

彼とティアナは毎日訓練後に会つてはキスをしていた。

「ねえ、ティアナ」

その日の晩に私はティアナを呼び出した。

「どうしたんですか、なのまさき」

ティアナは一瞬嫌そうな顔をする。

「今日ね、ティアナに見せたいものがあるんだ」

今日のための準備は万端だ。

「見せたいもの……ですか？」

ティアナは首を傾げながら言ひ。

「うん、訓練が終わったらまた呼ぶね」

私はそれだけ言ひとティアナと別れて自分の部屋に向かった。

……先ずは

部屋に着いてすぐ私は救急箱を台所に移した。

彼はティアナの血を飲んで汚れてしまったんだ。

彼はティアナの血を飲んだ。

だから

私の血を彼に飲ませて綺麗にしないと。

本当なら彼の汚れた箇所を切り抜きたいけど

そんなことをしたら彼は死んじゃうから駄目だ。

……ティアナのせいで汚れてしまった彼を少しでも綺麗にしてあげよう。

私は

私だけが

彼を本当に愛してるんだ。

だから、彼を綺麗にいてあげる。

愛しの彼を。

訓練が終わるよつ少し前にティアナを召喚室に呼び出した。

「見せたいものって何なんですか？」

私はティアナをバインドで拘束する。

「ツ！　なのはさん…？」

驚いてこるティアナの前にモニターを出す。

「…」

「私の部屋だよ

「ティアナに見せたいものはもう少しだけ時間が掛かるの  
「だから、もう少しだけここで待つてね」

私は何か叫んでいるティアナを置いて部屋から出でていった。

「……どうしたんですか、なのはさん」

ティアナと別れてすぐに彼に話しかけた。

「少し用事があるんだけど……すぐ終わるから私の部屋まで来てく  
れないかな？」

今日は何があつても彼を連れていかないと

「すこません、今日はもう疲れで……また今度じゃ駄目ですか？」

「……そんなにもテイアナに早く会いたいの？」

「私よりもテイアナの傍にいたいの！？」

「『いめんね、明日じゃなくて今日話したことがあるの……』とても大事な話だかい！」

「私が念を押すと彼はあきらめたよつて言つて。

「わかりました、行きましょうなのまさか！」

「彼はやつぱり私の言つことなどを聞いてくれる。

私も君の言つことなり句でも聞へよ。

「じやあ、早く行！」

私は彼の手を取る。

「……ひつと待つてください……！」

「？……忘れ物でもしたの？」

「……いや、やつじやなくして、何で手を握るのですか！？」

「……手を握つたら駄目なの？」

「いや…駄目つて訳じゃ無いんですけど……でも、その…恥ずかしいです」

「私は恥ずかしくないよ?」

彼は顔を赤くしながら言つ。

可愛いな。

どんな彼でも好きだけど、恥ずかしそうに顔を赤くする彼はまた一段と好きになりそう。

そんな彼の横顔を見つめながら私たちは私の自室へと向かった。

「それで、大事な話つて何ですか?」

部屋について彼は私に言つ。

「せっかく部屋まで来たんだからそんなに急がないで、少しほ休もうよ」

……そうしないと彼を綺麗にできない。

私は部屋の前に立つている彼をソファーに座らせた。

「紅茶がいい？それともコーヒーがいい？」

私は彼に聞く。

「……なのはさんと同じでいいです」

「なら、紅茶でいいね」

私は彼を置いて台所にむかつた。

私は台所に行くと紅茶の用意をする。

2人分のカップを置くと、1つの上に右手の人差し指を置く。

左手に包丁を持つと、右手の人差し指を軽く切る。

……ティアナの血で汚れた彼を綺麗にするために。

「つ……」

私はふと彼とティアナがキスをしたことを思い出した。

私の予想よりも深く切つてしまつた。

「あ……」

彼のカップに私の血が溜まつていく。

……これだけあれば綺麗になるかな?

私はそんなことを思いながら傷跡に包帯を巻いた。

もう少しだよ

もう少しだよ

君を綺麗にできるよ。

綺麗にしてあげれるよ。

「紅茶入れてきたよ」

彼の前に私の血が入った紅茶をおいた。

「もういえはなのはやん、フヨイトさんせどりしたんですか?」

ツ――

何で

「何で？」

「いや、少し気になつて……」

意味がわからない。

「何で私の前でフロイトちゃんのことを聞くの？」

「私が毎日のように部屋に誘つても余り来てくれないのに……何でやつと来てくれたと思つたらフロイトちゃんの話をしようとするのかな？」

そんなに私と一人でいるのはいやなの？

なんで？

私はこんなにも君の傍にいるために、君を邪魔な人達から守るためにがんばってるのに……

「い……いえ、なのはさんとフロイトさんは同じ部屋だから帰つて来ないのかと思いまして」

「そんなにフロイトちゃんに帰つてきて欲しいの？」

「私と2人で居るのはそんなに嫌なの？」

「そ、そんなこと無いですよ……ただ、少しだけ気になつただけです、本当に少しだけ」

「……それだけ？」

「はい、それだけです」

「そり…… フロイトちゃんは今日はヴィヴィオの部屋に入るよ、私が今日は君と大事な話があるからってお願いしたの」

はじめから君を部屋に呼ぶつもりだったんだもん。

フロイトちゃんには前もってお願いしどいた。

彼は一息つくと紅茶を口にする。

飲んでくれた。

彼が私の血が入った紅茶を飲んだ。

飲んでくれた！！

「美味しい？」

彼がカップをテーブルに置いたのを確認するといつ。

「美味しいですよ、とても」

「！」

彼が私の血が入った紅茶を美味しいって言つてくれた！！

「えへへ、嬉しいな喜んでくれて、私も君に美味しいって言つて貰えるように頑張ったんだよ」

これで少しは綺麗になつたかな。

えへへへ

君の役に立つたって考えただけで嬉しいな。  
幸せな気分になるよ。

……やっぱり、君を幸せにできるのは私だけ。

私だけなんだ……

「あれ？ なのはさん」

「どうしたの？」

「右手の人差し指どうしたんですか？」

えつー？

「えー？ …… ちょっと訓練の時に怪我しちゃって」

「でも、さっき手を握った時には何も無かつたと思つたんですが……」

「きっと左手で握ったんだよ……、だつてこれは訓練の時に怪我したんだもん……！」

「はあ、そうですか」

やつぱり君はわたしのことを見てくれてる。

私も君のことじちゃんと見てるよ。

「それでなのはさん、そろそろ大事な話について教えてくれませんか？」

「…… そうだね、そろそろ話そつか」

「大事な話つてそもそもどういう話何ですか？」

「君の人間関係について少しね」

「ここからが本題だよ。

君に関すること。

これを見てるティアナに関すること。

「最近、ティアナと仲が好いよね」

「え？、そうでしょうか前と変わらないと思しますけど」

「前からティアナとキスしてたの？」

違うよね。

君がティアナとキスするぐらい仲がよくなつたのは、きみが風邪で倒れてからだよね。

……あれから君が汚れちゃつたんだよね。

「3日前にね、見ちゃつたんだ、ティアナの部屋の前で2人がキスしてたの」

君のことをストーキングしたときにもみた。

君の事を見てると見てしまった。

「始めはね、嘘だと思ったんだよ?、でも、次の日も見ちゃつたんだ、流石に2日も続けて見ちゃつたら信じるしかないでしょ?」

……嘘じゃない。

君がティアナのモノになつた。

「やして昨日の休憩時間中にティアナに聞いたら2人が付き合って  
るって言われちゃってね……」

「あれはティアナの勘違いなのかな？」

「それとも君が無理やりティアナの彼氏にされちゃったのかな？」

多少強引でも君を取り戻さないと。

私の想を

「いや、そんなこと無いですよ……」

「何でティアナを庇うの？」

そつか！…、正直に言つちやつたらティアナに何されるか分からな  
いもんね。

でも大丈夫だよ、私が君を守から

私は何時でも、何処でも君の味方だよ。

君だけの味方なんだもん。

だから、ティアナのことを庇わなくともいいんだよ。

「いや、やうじやなくて……その、告白したのは俺から何です」

……違ひ。

「言つてる意味がわからなじよ？だって君はティアナに脅されてる  
んでしょ？」

「そつじや無きやこんな事あるばず無いよ」

君はティアナにやうじつように脅されてたんだよね。

「齎されて何ていません！！俺は、ティアナの事が好きだから告白したんです」

彼は顔を赤くしながら言つ。

私はそんな可愛い彼をクスクスと笑いながら見つめる。

「…………どうしたんですか

「ねえ、何で君はティアナが好きなの？」

「それは…………何時も気が利くし、何があつても前向きだし、優しい

し

「そう…………本当に君が告白したんだ」

やつぱり汚れちゃつてゐる。

彼がティアナのせいで汚れちゃつたよ。

大丈夫だよ

私が綺麗にしてあげるからね。

「私は君が望めば何だつてするよ、管理局を辞めろつて言われれば辞めるし君が自分のために一生働けつて言えれば一生働いてみせる

「…………何が言いたいんですか？」

「ティアナと別れて私と付き合つて

「ツー？…………そんなの嫌ですよーー！」

「何で？君から別れようつて言いたくないならティアナに言わせるのもいいよ？」

「いや、そういつ話じや無くてー、そもそも別れたく無いんですよ

俺はーー！」

ふーん

そんなにもティアナに毒されちゃったんだ。

「そんなこと無いよ、私はわかつてゐるもん君の本当の気持ちも、君以上に知つてゐる」

「何でそんなこと言えるんですか？」

「私は君のことずっと見てるんだよ

「だからわかるの君はティアナとは別れて私と付き合いたいってことも」

そのほうが君のためだ。

私は他のみんなと違つて自分の利益なんてかんがえない。君の事しか考えない。

そんな私といったほうが君も幸せだよ。

「言いたいことはわかりましたでは、俺はこれで」

「君は私が出した紅茶を美味しいって言つてくれたよね」

立ち上がりうとした彼を私は止める。

「はい、言いましたけど・・・それが何か？」

「私、本当はねキッチンで指を怪我しちゃったの」

「紅茶を入れるのに指を怪我したんですか？」

「うん……でも、少し違うかな『しちゃった』んじやなくて『する』ようにした』かな」

彼は首を傾げる。

彼はどんな顔をするのかな?

「何時もは包帯何でキッキンには置いてないんだけど今日は怪我することがわかつてたから用意しといたの」

「わざと怪我したって言いたいんですか?何でまたそんなことをへ.

どんな顔でもいいよ。

私はどんな顔でも愛してるもん。

「君に美味しい紅茶を飲んで貢つ為だよ

「紅茶の中に…… めわか

彼はまさか言いたげな顔をする。

「うん、 入れたんだよ、『私の血を』」

それを聞くと彼は口を押さえて走りだす。

方向からしてトイレかな?

「ねえ、ティアナ見てる?..

私は上を見て叫び。

「……彼は返してもいいよ

私は歩き出した。

彼のことを考えながら。

彼を奪い返す一歩手前までいったことに喜びを感じながら。

「嬉しかったんだよ、君に美味しいって言つてもらつて、紅茶と一緒に私の血の味も褒めてもらつてると考えただけで幸せだつたよ」

私はトイレの扉の前で中に入れるであらひ彼に言ひ。

悲しいな。

ティアナのときは「んなことしなかつたのに。

……なんでかな

なんで君はティアナの時とは反応が違うの？

何でかな何でかな何でかな何でかな何でかな何でかな何でかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかななんでかなかな

私は彼の前にモニターを出す。

「ちやんと私の手見えるかな？」

彼が私の想いに応えてくれないなり

「……何なんですか?」

「君がティアナと別れないんなら私のまま手首を切るよ?」

「こんな世界で生きる意味なんかない。

「な、何でそんなこと!…?」

「だつて君が私と一緒に居てくれないならもつ私には生きてる意味が無いもん」

「そんなこと無いですよ!…それになのはさんが死んだら六課の皆だつて悲しみますよ!…」

知らなによ。

君が傍にいてくれない世界なんか興味ない。

誰に悲しまれよ?と関係ない。

「ねえ、見てよ!」の傷

私は彼に見えるように包帯を取る。

「本当はもつと小ちめの傷にする予定だつたんだけど……君とトイアナのこと考えたらこんなに深くなつちやつた」

「ツー?……な、何でそんなこと」

「ちゃんと言つたよ?君が好きだから」

「こんなこと好きな人にやる行動じゃない!…!」

「そうかも知れないね……でも、いつもしないと頬は私を見てくれないでしょ?」

「そんなこと……」

「訓練が終わったあとティアナの誘いには乗ったけど私の誘いには  
断つてたじゃん」

「や、それは……」

「ほら、やつぱり君が私を見てくれるにはいつするしか無いじゃん」

私は今が幸せだよ。

君が私を

私のことだけを見てくれてこる今が

私は左手で魔力刃をつくる・

「どうする？君の答え次第では私は……」

死んでもいい。

君が死ねといつのなら  
死んでもいい。

「止めてください……ティアナとは別れますから……」

彼は叩きつけるように叫ぶ。

「本当？」

「はい、本当です……ですから血殺何て馬鹿な」と止めてください

「わかつたよ、君が言つなら」

君が死なないでと言つなら死なない。

私は君の言つことなら何でも聞くから。

私は魔力刃を消して少年の前に出していたモニターも消す。

彼はトイレから出でてゐる。

ああ、やっと彼を取り戻せた。

これからは私が君の事をするからね。  
もう誰も君を汚させない。

君を手放さない。

永遠に

「じゃあ、ティアナとまじめって別れる?」  
「……俺が別れようって言います」  
「そつか、わかったよ  
「そろそろ遅いしもうそろそろ帰つて寝たほうがいいよ?明日も早いんだし」  
「…………そりですね、わかりました」

俯いている彼は部屋から出でた。

「待つて!」

部屋をでて直ぐに私は彼を呼び止める。

「…………じつしたんですか?」  
「これが最後だと思ひナビ…………」 応ね

私は彼に顔を近づける。

彼は私と顔を合わせてくれない。

でも、いこよ。

今はまだ

時間はまだまだあるもんね。

「もし私以外の人と君が付き合つたら……また『ひこひつ』事になるかも」

「ツーーー?……覚えときまや」

「うそ、もうしこじ」

驚いた顔をする彼から離れる。

「おやすみ」

そのまま私は部屋に戻つた。

この話のその後の話をしようかな。

彼はティアナと別れてくれた。

彼は、私の言ひことを聞いてくれる

嬉しいな。

幸せだな。

君の傍にいるのは私  
私の傍にいるのは君

いつまでも

永遠に

幸せだよ

(後書き)

「ここにちはー豊ひでーす

病みつきなのはのセリフは少しだけ変えてあります。

『……』や『ー』、『?』などですね。

病みつきなのは私が始めて書いた作品で今でも評価してくれる方がいてくれたりなど、私の中では満足な作品になります。

……感想は少ないんですけど。

今回の裏話、無印ともに感想くれたら嬉しいです！（ほかの作品も）

PS 病みつきなのはと病みつきティアナを纏めて更にはオリジナルの話も書いた『病みつきなのはシリーズ』の連載始めました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0657y/>

---

病みつきなのは～裏話～

2011年10月30日20時07分発行